

## 「お別れパーティー」から得た「ゴール実現の四つのポイントと大切なこと」

大阪みなみ学力研 図書 啓展(まじょ ひろのぶ)

### 全員が舞台上上がったお別れパーティー

やっと晴れた修了式の日、三時間目、運動場に出ました。子どもがアレンジしたゲーム「逃走中」をするためです。「別れは明るく・・・これは以前からの私の考えです。子どもたちは思いっきり走り回って、ほんと楽しそうでした。

チャイムが鳴ったので、集合させて最後の話をしました。

「これで三年一組のすべてを終わります！」

と、私が笑顔で宣言したときです。

「図書先生、一年間どうもありがとうございました。」

「ありがとうございます!!」  
と、響く子どもたちの声。続いて、前にいる子が、

「先生、プレゼントです。」

黄色い冊子を私に手渡してくれました。びっくりして開けると、黄色の画用紙に一人ひとりメッセージを書いた丸いカードがたくさん貼ってありました。

「全然気がつかなかった。みんな、ありがとう!! 先生の宝物にします!」

不覚にもウルウル来そうだったのをこらえるのが大変でした。

前日、お別れパーティーをして給食を楽しく食べた後、所用で私は早退しました。聞けば、そのときに監督に来てくださった先生が提案してくださって、メッセージプレセントの運びとなったとのこと。算数科のITで毎日来てくださっていたその先生の心遣いに感謝しました。

多かった子どもたちのメッセージは、

「算数やいろいろな勉強を教えてください、ありがとうございます。」

をはじめ、

「ゴジラ、おもしろかったです。今までありがとうございました。」

というものです。お別れパーティーで、私と不登校気味だった真くんと二人で「モスラ対ゴジラ」の出し物をしたのです。日頃の私の指導する姿と余りに落差があるので、大うけでした。(実は毎年、一回だけやっています。)



もちろん、クイズや漫才、なんでもビンゴ、歌、くじ引きなど、好きなメンバーでエントリーした出し物が次々と披露されま

す。「やりたい子がエントリーする」スタンズですが、結果的に机をくつつけた舞台上に全員上がりました。これは学年初めに私が描いたイメージにかなうものでした。

「どの子も確かな基礎学力を持ち、自信をもって生きていけるようにする。交流活動が活発で、自治の力を持った集団、子どもが主人公のクラスにしたい。」

私はそのようなクラスをめざしてきました。リズム漢字を暗写する総復習の打ち上げを兼ねた「お別れパーティー」はその一つのゴール、実現の場でもあります。

描いたゴール実現のためのポイントとは、

「教師主導から子ども主導に徐々に移行」

「こつこつ継続するシステムを作る」と

「計画的に進めること」

「楽しむこと」

の四つだと実感します。

そう考えると、自分としては、今年は六十五点ぐらいの一年間でした。「計画的に進めること」が難しかったです。

**亮くんのメッセージが教えてくれたこと**

黄色の冊子の数々のメッセージの中で、意外なものがありました。亮くんです。

「図書先生、この一年間やさしくしてくれてありがとう。四年生になっても図書先生やったらいいなと思いました。」

実は、この子には一年間叱ってばかりでした。叱り方がまずかったな、と私自身よく反省していました。友だちを作りにくい故に、人の名前で遊んでちよっかいを出して気をひくようなことばかりしていたのです。その子がこう思っていたなんて・・・

そう言えば、お別れパーティーの後の給食のときです。最後の給食なので、事前に「遠足のときのように席を移動し好きな子と食べよう。一人ぼっちはないように。」と「お楽しみ給食」を呼びかけていました。

ふたを開けると、「先生と食べたい」と近くに三人来ました。

亮くんもその一人です。叱ってばかりの日頃のことを思い出し、食べながら声をか

けましたが、表情も楽しそうに見えず会話にならずじまいでした。

でも、今にして思うと、緊張していたのかも知れません。そのときのひとときが彼にとつてはとってもいい思い出になったのかも知れません。それがあのメッセージにつながったのかも知れません。

亮くんのメッセージを読み、思いました。  
(こんなふうに私のことを感じてくれていたのか。)

(どうして私は大の仲良しの子を一人でも作ってやれていなかったんだろう。)

(もっと、もっと早くに亮くんの気持ちを知ってあげていたらなあ。)

「一人ひとりの思いを充分くみ取る」

という教育的原則の実現がまだまだ不足していました。システムを作り一斉指導を工夫するとともに、作文や雑談で子ども一人ひとりの声を聴き、個別指導を裏切るものにしていく。

新年度の課題としてきたいです。